
モンスターハンターズストーリー

コニ・タン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンターズストーリー

【Nコード】

N6327C

【作者名】

コニ・タン

【あらすじ】

知らない人にも分かりやすくしようとしたけど、最近なんか吹っ切れてきたモンハンの二次創作です。オリジナルモンスターや独自の解釈などもありますので、そういうのが苦手な方は御注意です。物語の展開は……旅をしています、もうこの部分が既にモンハンっぽくないですね（笑）

その1：幼き日の憧れ（前書き）

プロローグのはずが本編並みに・・・作者も予想外です（笑）

その1：幼き日の憧れ

ハンターなんて意気地なしだ。

「よお、坊主。今日もきてるのか」

ここはモンスターの討伐依頼を受けるための場所、ギルド。そのはずだ。

だがここにいるのは酒を飲んでばかりの意気地なしばかりだ、確かにギルドは飲み食いも出来るようになってるが酒場ではないはずだ。

「おっさん！北の火山にリオレウスが出たんだぜ！」

机の一つを占領して飲んでばかりの竜狩人^{ハンター}に俺は大声で告げた。

「それがどうした、俺は狩りてえ時にやりてえように狩るだけだ。」

この壮年のハンターは俺の憧れだった。

昔一度だけ街の掟を破り一人で外へ出たことがあった、忠告は聞くものだ、そのための忠告なのだから。

案の定、俺は肉食モンスターの群れの長、ドスランポスに見つかり危うく死にそうになった。

その時たまたまその場に居合わせ、俺を助けてくれたのがこのハンターなのだ。

俺の憧れ、ハンターという者の本質を見た気がした。

それなのにこのハンターはあれ以来ほとんど狩りに出ていないのだ。

「どうしてだよ！？おっさんはリオレウスとやるのが怖いのか！？
どうしておっさんは戦わないんだよ！？」

そういつて、俺は逃げるように酒場と化したギルドから飛び出した。

かといってやる事もないので結局は酒場の前に座っているのだが。

「アイン……またなの？」

「うつせえよ、リーネ」

俺の隣におとなしそうな顔をした女の子が座る、幼馴染おさななじみのリーネだ。
ちなみに悪友でありギルドの受付嬢の娘であるため、前に外に出る
手引きをしたのはこいつだったりする。

リーネがハンターが狩場に向かうために使う馬車に付き添い、俺が
荷物の中に隠れて狩場に出たのである。（そのハンターがおっさん
だった訳だ）

……そうだ。昔のことを思い出したおかげでいい事を思いつい
た。

「リーネ、また前みたいに外に出ること、できるよな？」

リーネは渋ったような顔をしたが、俺の顔を一度見ると目を逸らし
言う。

「出来ない事は……無いけど……」

そして今日の夜、あのリオレウスを狩りに行くメンバーがいてそれに潜り込むことにした。
見てろよ、おっさんが狩らないなら俺が狩ってやる！

「アイン、もう出ていいよ」

外からリーネの声がする。それに応じ、俺は袋の中から出る。

「ぷっ！アイン・・・それやっぱり変！」

「笑うな！これが一番ごりてきなんだ！」

俺の完全武装を見てリーネが笑う。

頭に鍋のふた、手には包丁、胸には未加工の鉄板、腕には自分で作った手甲を付けている。

俺の家は鍛冶屋で日用品でも十分に頑丈に作ってある、まあ雄火竜おすかりゆうとまで言われるリオレウスの火炎を防げる保証は無いが。

「いつまで笑ってんだ！俺は行くぞ！」

「くすくす、いつてらっしゃいアイン！」

「いつてらっしゃい」に恥ずかしい思いを抱きながらも俺は馬車から下りる。

しかし前を向いた瞬間に今まで感じたことの無いような熱風、家の鍛冶場でもここまでの熱は持たない。

目の前に巨大な生物が舞い降りて来る事を示す大きな影が出来る、

まさか

「リオレウス！」

リーネが叫ぶ、目の前では手負いのリオレウスが着地したところだった、おそらくハンターが仕留め損ねたのだらう。

最悪だ、ここにはリーネがいる、自分だけなら死んでも挑む気だったのだがリーネを巻き込みたくない。
それに

「あ、ああ・・・」

情けない事に足がすくんで立てなかった。

雄々しい紅い甲殻からたに両方合わせて本体の2倍はあろうかと言う翼、長く力強い尾には太く鋭い刺が付いており、極め付けは獲物おれを見つめる紅蓮の両目。

やられるとしてもせめて一撃は入れてやろうと思っていた、だが情けない事に本物の飛竜ひりゅうを目の前にと全然体が動かない。

ギヤアアアオオオオ！

リオレウスが空に吼える、喉が渇く、頭は真っ白で昔の事がぐるぐる回っていた、死を、覚悟した。

だから気が付かなかったのだらう、自分の背後より走り出る騎馬の存在に。

硬い物が堅い物を切り裂く音、火竜の悲痛の叫び、そして鎧に身を包んだ懐かしきその姿。

「お・・・おっさん・・・」

声を振り絞り、かろうじてそれだけの言葉が唇から零れ落ちた。

「あんまり親を心配させるもんじゃないぞ、ホレ」

壮年のハンターが懷から取り出した紙は依頼クエストが書いてあるものだった。

紙の一分には「うちの子を探してください」とある、もちろん俺の親からの依頼だった。

「お、おっさん、おっさん。ふ、ふええ・・・」

それから俺は鎧姿のおっさんにだらしなく泣きついた、おっさんも特に何も言わず優しく頭を撫でてくれた。

「飛竜も無限にいるわけじゃあ無い。若い者もんに経験を積ませたくてあんまり狩って無かったんだがな、おめえを落胆させたようで悪かった。」

おっさんはそれだけを呟き、俺が泣き止むのを待ってくれた。
おっさんの武器が伝説級の巨大龍の素材で作った武器、龍刀りゅうとうだと知ったのは後のことだ。

俺がハンターになる事を決意した夜の出来事だ。

その1：幼き日の憧れ（後書き）

長いですがここまでがプロローグです、次から本編が始まります。
モンハン好きの方もそうでない方もお暇ならこれからも読んでやってください。

その2：沼地の戦いと夢への一歩（前書き）

ゲームでうやむやな所などは独自の解釈により執筆を行っておりま
す、ご了承ください。

その2：沼地の戦いと夢への一步

ここは湿った空気と濡れた草、半分泥の地面が支配する領域、沼地ぬまちだ。

その草の陰に隠れて鋭い眼光で開けた場所の中心を睨む影、それは青年だった。

それなりに経験の積んだハンターなら倒した飛竜そざいの体を加工した武器や防具を身に付けているものなのだが、その青年は残念ながら金属製の鎧に金属製の武器である。

その青年は駆け出しハンターの定番鎧とも言える《バトルシリーズ》を身に付けていた。

なぜ「シリーズ」と言う名前なのかと言うと、ハンターの鎧は軍隊の物と違って頭、胴、腕、腰、足の五つの部位に分けて作られていて、それらの一括した名称が「シリーズ」なのである。

ちなみに分けられている理由は簡単、全てを初めから買い揃える事が出来る者などいないからだ。

軍人は豊富な資産で鎧を買い揃える事ができるが駆け出しのハンターには不可能、つまりこの青年は駆け出しながらも「駆け出し卒業間近」といったところだろうか。

青年は眼をより細めてある一点を凝視する、大きな陰のある場所を。

「来たか……ゲリヨス……!」

沼地に生息する毒怪鳥どくかいちょうの名を青年が呼んだとき、それは起こった。正にその毒怪鳥　ゲリヨスが影のあった地点に舞い降りたのである。これをはじめて見た人間の第一印象はほとんどが「なんて間抜けな顔だ」となるだろう。

少し膨らんだ体系に飛竜に必須の翼、丸みのある尻尾と、さらに先程述べたように間抜け面をしていて頭の上には淡く光る鶏冠とさかがある、ちなみに体色は青だ。

「うおおおお！」

ゲリヨスが完全に降り立ったのを確認し、青年は己が背の絶対の信頼を置いている物 武器の大まかな区分で太刀たち、細かい区分で鉄刀と呼ばれているものの柄に触れた。

そして走る、ゲリヨスが気付いて雄叫びを上げるがもう遅い。

青年の太刀がゲリヨスの右翼の付け根を捉えていた。

グギヤオオオ！

悲鳴を上げたゲリヨス、見れば体中に刀傷がある、青年に追い詰められたのだろう。

切創を増やしたゲリヨスの目の周りが、突然赤く輝いた。

これはゲリヨスの特徴で命の危機に瀕した時、目の周りが赤くなり敏捷性が上がるのだ。

太刀を振り切った直後の青年はまったく反応する事ができず、目の周りを赤くしたゲリヨスの突進を食らった。

大きく吹き飛ばされる青年、普通ならばアバラの2、3本は確実に持っていかれているだろう。

しかしハンターを普通の人間の枠に当てはめて考えることは出来ない、現に青年はすぐに立ち上がり、そして腰の辺りを探り出した。その間にもゲリヨスの突進は続く。

まったくでたらめな方向に進んでいるが、毒を吐きながら走るのでハンターに恐れられている連続突進だ。

それを避けながらさらに腰の辺りを探る青年、どうやら目当ての物が見つかったようでそれを顔の前に掲げ一気に飲み干した。

それはハンターの間で《回復薬^{かいふぐやく}》と呼ばれている物で、飲むと戦闘に支障の出ないように体の傷を癒してくれる。

原理は知られていないがハンターなら一度はお世話になる道具^{アイテム}だ。青年が回復薬を飲み干した時、ゲリヨスは既に次の行動に移っていた。

目をつぶっても瞼を突き抜けるほどの閃光を鶏冠から放つのである。その影響を無くすには後ろを向いて回避行動をとるか

「させるかつ！」

青年のように攻撃で行動を止めるしかない。

距離はおよそ5メートル、その距離を一瞬で縮め青年は愛刀をゲリヨスの鶏冠の付け根に叩き込む。

先程よりも大きな悲鳴を上げたゲリヨスの頭から鶏冠が無くなっていった、青年の一撃により切り落とされたのだ。

「これでっ、止め！」

鶏冠を切り落としたままの流れで刃を下に向ける青年。

そのまま降ろされた太刀はゲリヨスの頭を中心に捉え、刺し貫いた。

「よ、よっしやああああ！」

断末魔の悲鳴さえ上げられなかったゲリヨスの姿を前にして、青年は勝利の雄叫びを上げた。

ギルドのカウンターに座っていると退屈だ。

まあ夜は退屈など頭の片隅にも無いほど忙しくなるのであって、つまりこの仕事　ギルドの受付嬢は忙しさが極端なのだ。

街を出てリオレウスに襲われたあの日から早8年、18歳になった私　リーネはギルドの受付嬢をしている。

受付嬢の娘が受付嬢になるとは、我ながらここまで順当にいくと微妙な心境だ。

私の身近に、家業を次男に押し付けてハンターになった馬鹿な親友がいるからその思いは深くなる一方だ、でもまあ彼の手助けをしたくてこの仕事を選んだのだけだ。

「あゝ！疲れたゝ！」

そんな事を言いながら鎧姿でギルドに入ってくる者がいる、噂の彼アインだ。

「討伐ご苦労様、アイン」

営業スマイルを浮かべて出迎える、アインを助けるためにこの仕事を選んだのだとしても、公私はきちんと分けるぐらいの節度は持っている。

「あゝ、うん。とりあえず水ちょうだい、沼地の水は汚くて飲めねえや」

その言葉に返事を返して水を汲んであげて、サービスとしてまかない料理の草食獣アブケロスの切り落とし井をつけてあげる。

公私を分けるなんて前言撤回、だってアインは悪友ですもの。

彼の座るテーブルに食事を届けた時、背中の荷物入れから飛び出た輝く物を見つけた。

「それってマカライト鉱石じゃない！ 討伐に行くなんて言っ
て鉱石掘りにいったの？」

マカライト鉱石とは綺麗な青色をした鉱石で、鉄鉱より質の良い素
材としてハンターの武器や鎧に広く使われている物だ。

「ちげえよ！ゲリヨスの頭を落としてきたんだ！」

そこまで言われて思い出した、確かゲリヨスは鶏冠の光を増すた
めに鉱石を鶏冠に溜めることがあるのだ。

「これで俺の鉄刀を強化するんだ、次はようやくリオレウス！人を
集めないとな！」

アインは1年前に本格的にハンターを始めてから様々なモンスター
や飛竜と戦い、勝ってきた。

ドスランボス、イヤクック、ドスガレウス
首領肉食獣、大怪鳥、大砂竜、そして今回の毒怪鳥。

バーティ
そろそろ集団でならリオレウスに挑んでも良い頃だ。

彼はあの日からリオレウスを狩る事を目標にハンターを続けてきた、
ここまで上り詰めて早くリオレウスを狩りたいと思っているはずだ。
そして私はそんな彼の夢を手助けしてあげられる。

「ねえアイン。リオレウスを狩るつもりなら良いお話があるんだけ
ど」

「？」

「2日前からリオレウスの討伐依頼を請けてまだ出発していないパ
ーティーがいるの、二人しか集まっていなからきつと入れてもら
えるはずよ」

「本当か!？」

依頼は請けてから5日間、仲間を集める猶予が得られる。

理由としてハンターは街から街へ歩いて依頼を請け負う者がいる、そんな人はたいてい一人で行動しているので現地で仲間を集める、そのための猶予期間だ。

そしてそんな事が間々（まま）あるため、たいていのハンターは実力の伴う者が入る場合は歓迎される事が多い、二人で挑むより三人で挑んだ方が生き残る確率も上がるのだから。

「そいつらはどこにいる!場所を教えてください!」

アインはその話題に激しく食いついた、目標のリオレウスとこんなに早く戦えるのだから嬉しいだろう。

「えーっとね、隣の宿の・・・」

この時はこれがアインと私の運命を左右するのだとは思っても見なかった。

その3：王者に挑む仲間たち！

私の隣には緊張した面持ちのアインが座っている。

太刀の柄には【^{みそぎ}楔】と銘が入っていた、昨日の内に鍛え直したのだ。さらに防具は大怪鳥と呼ばれる飛竜の素材で出来た《クツクシリーズ》だ。

昨日、リオレウスの討伐依頼を請けたパーティーがあるとアインに告げると、早速その人たちに会いに行こうとしていた。

しかしギルドから出る間際、せっかく鉱石を手に入れたからには強化してから会ったほうが良いと思い直したのである。（その際に加工を頼んでおいた鎧も受け取ったらしい）

強いハンターが手助けする分には良いが、弱いハンターと組んで共倒れした者も少なくない、自分を少しでも強く見せないと相手方に断られるかも知れないと思ったようである。

そして私が出発を一日待つてほしいという旨を伝えると快く承諾してくれたのだ。

・ギルドで昼過ぎに会う約束をしているのでそろそろ来るはずだが・

ギイイイイー

ギルドの両開きになっている木製の扉が、軋んだ音を立てて開いた。入ってくるのは鮮やかな赤髪が特徴的な20代前半と思われる女性、防具は頭からつま先まで砂漠に潜る砂竜の素材、《ガレオスシリーズ》で揃えられている。

その後ろにおどしたように身を縮めながら女性を追いかける、自分とそう年の変わらない青い髪を短く切った青年、こちらは砂漠

や沼地に生息するゲネポスの《ゲネポスシリーズ》だ。

この青年にはあったことがある、リオレウスの依頼を請けにきたのはこの青年だ。

「アイン、この人たちがそうよ」

私が言うとアインは緊張した表情を見せながらも立ち上がり挨拶する。

「ど、どうも。アイン・フレンツです。」

アインが挨拶をする、するといきなり赤髪の女性がアインの手を取りすごい勢いで上下にブンブン振る。

「キヤアアア！ 可愛い男の子オオオ！ やったわ！ 天は私を見放さなかったわ！」

「……ハンターは曲者が多いがこれは予想外だ、なんというか予想以上だ。」

「私はセレインね！ セレイン・クー！ こっちは弟子のデリオだよ！」

女性 セレインさんがハイテンションで自分と連れの名前を紹介する。

「どど、どうも、デ、デリオで、です」

どもってる、どもってる。こんなやつでハンターが務まるのだろうか。

とりあえず二人の経歴を見てみることにする、月に一回だがギルド本部から地方ギルド（ここの様な所だ）に滞在しているハンターの履歴が送られてくる。

はぐれのハンターでない限りはギルドに登録してあるはずだしセレインさんとデリオ君が来たのは10日前だから履歴が手元にあるはずだ。

カウンターの奥の本棚を探てみるとすぐに見つかった、デリオ君のページから見てみる。

（えゝつと現在19歳・・・年上なんだ、出身地はココナ村、近くの村ね。

得意な物は・・・料理！？ 追記事項に「人と話すのが苦手です」！？）

経歴を見る限りハンターなんかより定食屋を開いた方が良い人生をおくれそうである。

気を取り直してセレインさんの履歴を見る、こっちの方がよっぽど曲者なのだが。

（・・・登録時の年齢：幼女、現在の年齢：お姉さま。好きな物は男の子、得意な事は何でも鑑定、追記事項：「おなか減った」・・・）

履歴は適当に書いても良い、これを見てギルドは依頼をまわすのでお代は自分の命となるからだ。

現に、この街でどう見ても30を超えた男が登録の時「23だ」といって登録した事があった。

そしてその男は体力に見合わない依頼をまわされ、この街に帰ってくることはなかった。

（それにしても良くこんな事を書いた人をハンターにしたものね）

とりあえず、アインにはまずリオレウスよりも先に強敵がいるようだ、ある意味リオレウスよりも手ごわい強敵が。

「ふうゝ・・・」

「なに、ため息ついちゃってるのカナ？アイン君？」

「あんたのせいだよ！」

全力で怒鳴ってやった、あの後セレインの手から逃れられたのは今より1時間前。

いまや夕日をバックに馬車が走っている。

馬車といっても前だけで俺たちが座っているのはバザーで果物を入れていようなワゴンを4倍くらいの大きさにした物だ、ギルドはケチれるところはどこまでも削る。

「お、お、落ち着いてアイン君、あ、あれは師匠のびよ、病気だから」

腹が立つぐらいどもるデリオ、だがセレインは慣れているのか普通に言葉を返す。

「病気って何さー！　これぐらい普通でしょ！　街に着いたら目に付いた男の子に挨拶したり、酒を飲ませて前後不覚になったところ

で口説いたり、寝込みを・・・」

「わー！ わー！ わー！」

これ以上は青少年の発育上良くない発言が出そうだったので全力でとめる。

道中、二人の関係を聞いてみた。

セレインは大陸からやって来たハンターで（ここは島国だ）デリオの村に偶然立ち寄ったらしい。

まだドスランポスを倒した程度の素人だったデリオはセレインの實力に感動し、弟子になったということだ。

セレインのほうも「若い子なら全然OK！にやはははは」とかいつて引き受けたそうだ。

そして今回、弟子の教育のためこの依頼を請けたので俺が来たのは「同レベルの相手との連携」と言う観点でとても都合がよかったらしい。

でもそんな事はどうでも良い、今俺の心を占めているのは・・・

（飛竜の王者・・・リオレウス！ やつと戦えるんだ！ あいつを倒しておっさんを驚かしてやる！）

心にそう誓うのだった。

その3：王者に挑む仲間たち！（後書き）

本編に出なかつたので一応言っておきますとデリオのフルネームはデリオ・ヴィレオス、リーネのフルネームはリーネ・クレイオスです。

次はいよいよオレウス！気合入れて書きます！

その4：到達、そして物語への序曲（前書き）

今回からキャラ紹介もつけてみようかと思えます（遅っ！）

アイン・フレンツ

使用武器：太刀

好きなもの：うまい飯、ハンターのおっさん（親のように慕っている）、リーネ（友達として）

嫌いなもの：無い、何があろうとそれを全力で楽しもうとする。

追記事項：年上にもタメ口だがそれは「誰とでも仲良くしたい」という気持ちの表れである。壮年のハンターに助けてもらった日以来何かに怯えたりしたことは一度も無く、どんな逆境だろうが楽しみとして受け取れるある意味ハンターとして理想的な性格をしている。

その4：到達、そして物語への序曲

とりあえず《森丘》と呼ばれている狩場に着いた俺たちは支給品ボックスを探る。

支給品ボックスとはその名のごとくギルドからの支給物が置いてある箱だ、ギルドとしてもハンターに簡単に死なれては困るのでこういう措置を取っている。

その中から携帯食料を取り出して食べようとする

「ちょ、ちよつと待つて。も、もったいないから、さ、ささきにつち……」

そう言つてデリオがこんがり焼けた肉を差し出してくる。

そういえばさつきから狩場拠点の片隅で《肉焼きセツト》を出して、何かやっていると思つたら……狩場に着いてまず肉を焼くなどハンターとしてどうかと思うが。

（あ……うまい……）

呆れながら食べたのだが結構うまかつた、たぶん《採取》したのであるう香草や薬味の味がする、焼き加減も少し生が残るように、それでいてジューシーに。

この狩りが終わった後も組みたいな、とちよつとだけ思った。

「ほいほい、とつとと行くよー！ガキどもー！」

少し離れたところからセレインの声がする、てかあの人何歳なんだろう、見た目20代前半だけどたまに言い回しがちよつと古いし・

「ん？今なんか失礼な事考えて無かった？」

「いえいえ、何も」

とりあえず思考放棄、これからリオレウスと戦うつて言うのに俺は何いらない事を考えてるんだ。

俺たちはリオレウスがよく居るという丘の方へ歩き出した。

丘の奥の方にたどり着くと、風を感じた。

あの時と同じ風、熱を持った激しい、熱い旋風。

風がもたらす結果は分かっている、意識せずに俺は口元を歪めた。

「ようやくやれるな・・・！リオレウス！」

俺の声に答えるようにそれは天空より姿を現した。

あの時と同じ紅い体、あの時と同じ大きな翼、あの時と同じ燃える
双眸。そつぽう

違うのは傍らにいる仲間、それと俺自身だ。

「とりあえず意識こつちに向けるよ！」

セレインは叫ぶと背中に掛けてあつた武器　リオレウスの雌^{メス}である
リオレイアの素材で出来た弓^{クインプラスター}を手にした。

空気を裂き飛んでいく矢、それは見事に命中しリオレウスがこちら
に気付いた。

リオレウスの口が燃える　否、口内で高熱の火球を生み出している
のだ。

そしてそれは放たれた、弓を放っている無防備なセレインに向かって。
派手な音を立てて着弾する火球、しかしそれはセレインに届かなかった。
デリオの武器である長槍 ナイトスクウイド ランスの対となっている盾で防がれたのだ。

「にゃっはは、感謝するよお愛弟子！」

「しゅ、集中してください！」

二人の会話中にも俺は駆ける、奴が降り立つ場所へ。
リオレウスが地に降りるまでおよそ80cm、十分届く距離だ。
リオレウスの下に潜り込み、巻き起こる風圧に耐え太刀で尾を斬りつける。

ギャオオオオオ

苦悶の叫びを上げ、リオレウスが地に落ちた。

それを待っていたとばかりにデリオが槍を正面に構え、こちらに向かって走ってくる。

あれがランスの最強の攻撃手段、突進だ。

槍の先端がリオレウスの顔に当たり、そしてあごを貫く。

そのまま勢いを落とさず喉を搔かき、腹を突き、尾を裂く。

リオレウスは予想外の攻撃に驚いたようで、さらに体勢を崩し倒れこむ。

俺が頭を、デリオが体を、セレインが翼をそれぞれ全力で一斉に攻撃する。

「ウオオオオ！」「だあああ！」「あつたれー！」

だが、それでも火竜の王は立ち上がる。

「クツ！さすがに今まで見たいには行かないか」

「気いつけなさい、アイン！あいつキレてるわよ！」

見るとリオレウスは頭の角がぼろぼろになり翼にあつた翼爪よくそうも割れているが、その眼はさらに輝きを増して口からは地獄の業火のような炎が見え隠れしている。

ゲリヨスほど顕著ではないがモンスターは身の危険に晒されると防衛本能により普段使っていない分の筋肉やその他の器官まで使うようになる、それをハンターの間では怒る、キレるといっているのだ。

ギアアアオオオオオ！

先程よりも一層大きく、凶暴な咆哮を上げるリオレウス、俺はまったく体が動かなくなつた。

あの日のように恐れて体が動かないのではない。心の奥底、恐怖から逃れようとする危機回避本能が皮肉にもその身を危機に陥れさせているのだ。

「ち、くしょ・・・！」

「「アイン！」」

二人が同時に叫ぶとデリオはリオレウスの前へ、セレインはその場で素早く弓を射いつた。

セレインの放った矢は俺の頬に当たり、痛みのショックで体が動くようになる。

それだけでは間に合わなかっただろうがリオレウスはデリオが止めてくれている。

そのまま横に飛びながら会話を交わす。

「ごめん、デリオ！」

「い、いいよ。そそれよりも早くた、体勢を立て直して！」

こんなときでもどもるデリオを見て、少し落ち着いた。

「少し時間を稼いでくれ！」

俺が告げるとデリオは頷きを返し、セレインは手でOKのサインを出した。

二人の連携は見事だった、デリオは重厚で安定した重心を持つランスだからこそ出来る回避方法 ステップでリオレウスの攻撃を紙一重でかわし、攻撃が集中しすぎる前にセレインが矢でリオレウスを挑発する、単純な事に繰り返しだが同じ心で二つの体を操っているわけでもないので実際やるとなかなか難しい。

その二人の頑張りに報いるためにも俺は集中する。

（心を研ぎ澄ませ……！全身に力が行き渡る感じ……何者をも恐れぬイメージを……！）

それぞれの武器を専門にするハンターはその武器の極意を身を持って知らなければならない。太刀の心は東国のサムライという剣士に通ずる、斬ることに集中する意志、その極意のイメージを練気（れんき）と呼ぶ。

体中に力がみなぎる、自分が何か違う強大なものになった感覚、太刀を通して今の自分は最強だと言い聞かす事で本当に強くなれるの

が太刀使いだ。

戦場を見る、先程から弱ったまま戦っていたリオレウスがついにふらつきながら飛び立とうとしている。

「逃がすかア！」

そう言つて、俺は走る。初撃の時とはまったく違う、風のような速さでリオレウスの元へ。

体中に溜めた練気を刀とそれを持つ手に集中させるイメージ、体が型を覚えるほどに練習したその技を放つ。

「食らえええええ！」

気刃斬り おっさんに必死で頼み込んで教えてもらつた俺の最強の技。

一度、下段から頭の上へ回すように振るいその勢いを利用して袈裟懸けに切る、単純といえば単純だが練気と混じる事により効果的な技へと昇華する。

さすがのリオレウスも弱つた体に気刃斬りは耐え切れるはずがない、俺の太刀で胸を裂かれ落ちた体勢のままで死んでいた。

「はあ・・・はあ・・・やった・・・！ やつと・・・！ 勝つたああああ！」

デリオはおれと同じように地面に倒れこみ笑っていて、セレインはいつも通りお気楽に「にやはは」と笑いながらリオレウスの傍で手招きしている。

俺は微笑みながら立ち上がり、剥ぎ取りナイフを片手に素材を手に入れようとリオレウスのほうへと歩み寄つた・・・。

これでアインは自分の理想のハンター像に追いつけたわけである。
しかし彼はまだ知らない、自分がどのような道を歩むのか。
ここから、^{ストーリー}アインの物語が始まる。

その4：到達、そして物語への序曲（後書き）

題名の意味（と言っかなんと言っか）が出せてとりあえず満足です。ここからゲームのモンスターハンターと違うようになっていきますがご容赦を。

その5：見送り、決意、始まり（前書き）

たぶん始めての一日に連続2話投稿です（笑）
とりあえずキャラ紹介

リーネ・クレイオス

使用武器：片手剣（護身用に少しだけ使える）

好きなもの：静かなお客、アイン（友達としても異性としても）
嫌いなもの：リオレウス（1話の時以来トラウマになっている）、
無意味に騒がしいお客

追記事項：実は普通に戦闘ができる戦う受付嬢。リオレウスに襲われた時に一步も動けなかった事で「自分は狩りで役に立てない」と思っており、受付嬢になる事を選んだ（アインも動けなかったので「自分はリーネを守りきれない」と思っており受付嬢になる事を勧めた）

その5：見送り、決意、始まり

これはアインたちの狩りの後、町へと戻る馬車での出来事。

「ねえ、アイン？ 私達といっしょに来る気は無い？」

デリオが焼いた狩場で釣った魚を食べながら、セレインはアインに向かって唐突に言う。

「いっしょに・・・って、どういうこと？」

「ぼ、僕たちは、た大陸に、い、行こうと、思ってるんだ」

デリオがどもりながら補足する。

「大陸に行けばここじゃ見られないモンスターもいっぱいいるし武器とかの技術もすごいわよ！ デリオだけを鍛えるつもりだったんだけど君の事も気に入ったからさあ・・・」

周りに同年代のハンターなんか居ないので気にしていなかったアインだが、実は気刃斬りとは太刀の最高位の技で、そんな簡単に使えるものではない。

「でもまだ《初の型》だけしか覚えてないし・・・」

気刃斬りには《初の型》《次の型》《終の型》を連続で繰り出す一連の流れのまとめた呼び方でアインはまだ《初の型》しか習っていない

ないのだ。

「それでもその歳でそこまで出来たら上出来よん。まあ、私たちは明後日^{あさうし}に旅立つから考えておいて。」

そこで一旦この話は終わり、狩りでの出来事や馬鹿話なんかをしなから馬車に揺られた。

しかしアインの頭から先程の話が離れる事はなかった。

夜になり、やがてアインたちはギルドへ到着した。

「アイン！リオレウスを倒したのね！」

いきなりリーネがアインに飛びつく、というか抱きつく。

「う、うわあ、おい！離れる！」

「心配したじゃない、心配したんだよ！もうちょっと早く帰ってきてよお・・・」

「泣くな、泣くな！何か俺が悪いみたいだろ！ていうかいつもと同じぐらいの時間だろ！」

相手は別だが出発の時と同じ状況になったアインであった。

とりあえず落ち着いたリーネとアインは二人っきりで話しをしている。

セレインとデリオが帰るとき、ギルドで飲んでいたハンターたちを「気を利かせて上げなさい、にやはは」とか言いながら連れ出したので二人だけになったのだ。

「アイン、あの・・・」

「俺さ」

リーネの台詞を遮り、アインが話す。

「大陸に行こうかと思ってる」

「・・・！」

リーネが息を呑んだことがアインにも分かった、だが続ける。

「セレインが誘ってくれたんだ。俺、やっぱりこの仕事好きだからさ、もっと強いやつを狩って見たい、もっと強い武器を持ってみたって・・・思っちゃうんだよな」

「・・・」

「お前に相談しなかったのは悪いと思ってる、でももう決めたんだ・・・向こうに着いたら手紙でも書くよ」

その言葉を最後まで聞かず、リーネは自宅になっているギルドの2階に上がり自分の部屋に閉じこもった。

「リーネ・・・」

彼女が泣いていた事に、彼は気付かなかった。

そうしてアインは家路に着いた、親にもこの事を話さなければなら
ない。

しかしそこで意外な人物に出会った。

「・・・！ おっさん！」

そこにいた人物はあの壮年のハンターだった。

「・・・なるほど、おめえも偉くなったもんだな」

既に頭髪のほとんどが白くなった元・ハンターはアインの話を聞いて
何度も頷いた。

「男ならでけえことをしてえのは当たり前！ 前つてモンよ！ 最後まで自
分で教えられなかったのは残念だが・・・《次の型》の奥義書だ、
これ見てしっかり勉強しな」

アインに手渡されたのは一枚の古い紙、しかしそこには、確かに長
年受け継がれてきた技術が記してあった。

「ありがとうおっさん。・・・ところで《終の型》は？」

「あれは秘術だからな、どっかに記しちゃいけないのは暗黙の了解

みたいなもんよ。どうしても覚えたいんだつたら向こうで師匠でも探しな」

「・・・分かったよ、最後までありがとう、おっさん！」

そう言つて師匠と弟子は別れた、未来のために。

次の日の朝。

「あなたがハンターになった時から・・・あのと同じ場所に行くことすら覚悟していました。今更私は口を挟むつもりはありません。」

アインが髪を結い上げた妙齡の女性 自分の母に向かって旅に出る旨を伝えた後の母の第一声がそれだった。

アインには既に父はいない、流行り病だったらしい。だからこそあそこまで老ハンターに懐いた訳だが。

「かあさん・・・ごめん」

「そう思つんなら」

後ろから声がする、壁にもたれかかつて話を聞いていたのはアインの弟だ。

「初めからハンターになんかなるなよ、死ぬ確率が高い事を知らなかったほど馬鹿じゃないだろ、兄さんも」

アインがハンターになる時、一番反対したのは弟だった。

「これ以上母さんを悲しませる気か！」とすごい剣幕で怒り、殴り合いの喧嘩さえした。

「この仕事も本当なら兄さんがやるはずの物だった」

（そうだ、ハンターになると我が俵を言い、一つ下の弟に働かせているのは自分だ）

今更だがアインは悔やむ、生活費を入れているからといって世間的に許される事ではない。

「すまな・・・」

「でもね、僕はこの仕事を結構気に入ってるんだよ」

アインの言葉を遮り、弟は長い棒のようなものを投げてきた、アインは反射的にそれを受け取る。

「興味があつたから作ってみたけど、いらないから処分しておいてくれよ」

それは火竜の素材で作られた太刀、《飛竜刀【紅葉】》だ、家にリ
オレウスの素材の余りは無かったからアインが狩ったりオレウスの
素材で作ったのだろう。

よく見れば目にクマがあることに気付くはずだ、彼は徹夜で仕上げたのだから。

「・・・ありがとう」

「いらないだけだ、ゴミに出す手間が省けた」

弟自身は仏頂面だったがその太刀には確かに「頑張れ」という意思が籠められていた。

様々な人の意思に見送られ、アインが旅立つその日の朝。

「う、うう……」

リーネはまだ引き籠もったまま、泣いていた。

（せめて最後に見送りたいのに、どうして泣いてるのよ！？こんなんじゃないじゃない！）

ベッドに突っ伏していると、いきなりドアが開いた。

「まだ泣いてるの？」

母親だった、いつも優しい人で、受付嬢の先輩でもある人。
でも今はその姿を見ても腹が立つだけだった。

「出てってよ……！」

「あらあ、これを見ても言うかしらね？」

興味を引かれて顔を上げる、みつともないぐらい、涙でぐしゃぐしゃになった顔だが身内になら見せても対して抵抗はない。

「何、それ？」

「大陸のギルドへの推薦状よ、行きたいんでしょう？アイン君といっしょに」

一瞬の思考停止、だつてそれって・・・

「アインといっしょに・・・大陸に行けるの？」

「アイン君があんたのこのギルドを使えば、だけどね」

胸を張る母親に「お母さん大好き」と抱きつきにいったら「現金な子ね」と言われてひらりとかわされた。
とりあえず・・・そうと決まれば準備だ。

「待つてゝ！私もいくゝ！乗せてゝ！」

腰に護身用の片手剣を吊り下げた私が来たとき、アインは一瞬驚いた表情になった。
ハンターカリンガ

しかしそれもすぐ笑顔になり、こう言ってくれるのだ。

「ああ。一緒に行こう！」

彼の物語は動き始めた、いや彼だけではない。
彼と彼女とその他たくさんのこれから出会っていく者たちの物語

は今、
始まったのだ・・・。

その5：見送り、決意、始まり（後書き）

まずモンハン知らない人に補足致しますと気刃斬りの《型》は実際のモンハンにはありません、自作です。

あと今回は新キャラが大量に出ましたがおそらく全員再登場する事はないでしょう（笑）

ここから本格的に書きたかった事が始まります、長かった……他にも書いてる途中の話があるのでここからの更新はそっち優先になるかもしれません。

では見送ってくださいっている方々にたくさんの感謝を！

その6：新たなる地への船旅（前書き）

セレイン・クー

使用武器：弓（実は何でも使えるがパーティ構成を考えて今は弓を使っている）

好きなもの：かつこいい（またはかわいい）男性、お菓子

嫌いなもの：しつこい性格の人（男でも女でも）、分からない事

追記事項：始めはパーティの知恵袋のようなキャラにしたかったんですが書いてるうちに変人に……

大陸のハンターという以外は謎な女性です。たぶんいつか謎が解けます……たぶん……

年齢について訊ねるのはタブーでしつこく聞いた人間は次の日、謎の失踪を遂げます（笑）

その6：新たなる地への船旅

「彼」は待っていた、この暗い場所で。

暗かろうが明るかろうが「彼」には光を感じることが出来ないの
別に良いのだが、体中に巻きついた拘束具は不快だった。「彼」を
逃がさないためだろう。

敗北し気を失った時は死を覚悟した。

しかし次に目を開けるとどうだろう、「彼」の状態は死よりはるか
に屈辱的で、どうなるとも知れぬ恐怖が付き纏う状況だった。

「彼」は誇り高き者だった、今まで何百もの人間を屠^{ほふ}り、何千もの
肉を食^はみ生きてきた存在だ。

だから「彼」は最後まで待つのだ、己が有利になる状況を。

「彼」が完全に敗北するなど、あつてはならない事だったから。

「うーん、快適〜！」

俺の隣でリーネが言う、ここは船の上だ。

「しかしセレインもさすがだよな、俺も無料^{ただ}でここまで快適な船
旅が出来るとは思ってなかったよ」

あの後、しばらく旅を続けた俺たちは海際までたどり着いた。

しかし大陸までの定期船は船賃が高く、セレインとデリオだけならまだしも4人が乗れる金は無かった。

そこでセレインが提案したのだ、「モンスターを輸送する船に護衛として乗り込もう」と。

世の中にはモンスターをペットにしたり食材にしたり、討伐だけでなく新鮮さを要求する人間がいる。

その時ギルドは「捕獲」の依頼を出し、ハンターにモンスターを眠らせてそれを依頼主の所まで運ぶのだ。

その依頼が大陸側から来たものなら船で運ぶ、その時に船員の安全と安心のためにハンターが「護衛」の依頼を請ける事があるのだ。

確かにそれならばむしろお金を払われる立場になるのだが、腕が立つハンターしか請けられないので無理だと思った。

しかしセレインがその町のギルドに依頼を請けにいくとすんなり仕事をもらえたのだった。

「セレインさんって何者なんだろうね、ギルドの人は何か頭下げまくってたし」

後半はくすくす笑いながらリーネが言う。

「只者じゃない事は今までの狩りで散々思い知らせたけどな、つとおい！デリオ！」

甲板の上でうろついているデリオを見つけて手を振る。

彼は少し鈍い動作でこちらに向かってくる、その様子を見てリーネ

がまったくすりと笑った。

彼はここまで来る途中の冒険で得た素材と金を使って《ハイメタS》シリーズに鎧を変えていた、しかしその鎧は重くて大きいのでデリオが太ったように見えてなんだかおかしい。

「そ、そこにいいんだ」

相変わらずデリオのどもりは健在である。

「今は狩りの時間じゃないんだから鎧を脱げば良いじゃない、デリオ君」

「そそ、そんなわけにはい、いかないよ、リ、リーネちゃん。こ、これもしし仕事なんだ」

確かに「護衛」の依頼だが本当にモンスターが逃げ出す事など稀だ、^{まれ}そこまで警戒しなくても良いと思う。

「そ、そういう君たちも、ちゃ、ちゃんと着てるじゃないか」

「俺たちのは軽いからだよ、デリオのは見てるだけで体が重くなりそうじゃん」

ちなみに俺も鎧を強化しており、念願の火竜鎧、《レウス》シリーズで全身を固めている、今は《飛竜刀【紅葉】》を使っているのので全身レウス素材である。

リーネも一応ハンターが使う鎧らしいのだがどう見てもいつもの受付嬢の服を黒くしたようにしか見えない、《メイド》シリーズというらしい。

母親にもらったそうだが、セレインが見ると「うつひゃー！それレアモンじゃん！」とか言っていたのでそれなりに強いのだろう。

最後にセレインさんの鎧を紹介するがこれは岩竜とまで呼ばれる硬い甲殻を持った飛竜、バサルモスの素材で出来た《バサル》シリーズである。

ある日、街に滞在しているといきなり荷物が送られてきて中身がこれだった。

彼女曰く「みんな強くなってるし合わせようと思って家から送ってもらった」だそうだが、やはり底が知れない。

「その通り！見てると暑っ 苦しいから脱ぎなさい！ニヤはは〜」

その台詞の聞こえた方を見ると予想通りの人影があった、しかし場所が予想外だった。

「せ、セレイン！？どうしてマストなんかに！？」

「なんとなく〜」

一応予想通りの答え、彼女の性格はこのたびで大体分かっていた。とんでもない事でもニコニコ笑いながら意味もなくやってのけるのだ、良い事でも悪い事でも。

「あ！何か潮が乱れてる！気をつけなさい！」

「どうして」と聞く間もなく衝撃はやってきた。

揺れる揺れる揺れる、船が大きく揺れている。

船に乗ったのは初めてなのでもちろんこういう状況は初めてだった。

「うひゃあ!？」

あまりの揺れにリーネが倒れ込みそうになるが俺が支える。
しかし

「うおっ! ヤバイ、倒れる!」

「あー、もう! せっかく助けてくれたのにかっこ悪いー!」

そのまま倒れそうになる俺をさらにデリオが支える。

さすが長槍使いは重心の置き方を心得ているので倒れる心配はなさそうだった。

「ここは大丈夫・・・でも積荷モンスターの方は・・・!」

上からセレインの声が聞こえた。

その時、その声の逆方向 真下から大きく歪いびつな叫びが聞こえた気がした。

「彼」は歓喜に打ち震えていた。

自らを縛る拘束具が先程起きた衝撃で外れたのである。

さらにもう一つ檻おりがあるのだが「彼」の力を持ってすれば破壊は容易い。

死を覚悟した自分がまだ生きられる事の喜よろこびに、この恐怖から逃れる事のできる歓よろこびに「彼」は吼えた。

「彼」は知らない、ここが海の上だということも自分の真上にハンターがいることも。

しかし知っていたとしても「彼」は同じことをしただろう、それ以外に生きる道はないのだから。
檻を突き破り、「彼」は甲板に現れた。

その6：新たな地への船旅（後書き）

「護衛」の依頼はオリジナルです、実際のモンハンにはありません、たぶん……

最新のフロンティアをやっていないので新しいシステムなどがあるかもしれませんが、わからないのでオリジナルのつもりでそうでない事もあるでしょうが、ご了承ください。

その7：白き稲妻（前書き）

デリオ・ヴィレオス

使用武器：ランス

好きなもの：料理を作ること、子供
嫌いなもの：長く話すこと

追記事項：故郷の村の財政が厳しく、それを補うためにハンターになった村長の息子。

いつか一流のハンターになって一人で村を担える位になるのが夢。

その7：白き稲妻

「こいつは……なんだ!？」

真下から甲板をぶち破り現れた「それ」は今まで見た事が無い、異様な外見をしていた。

白い体、鋭い牙、翼に尻尾、ここまでは飛竜だといえる形をしている。

しかしそいつには目が無い、そして丸みを帯びた頭の先に付いた口だけが赤く不気味だ。

「それ！フルフル！」

マストの上からセレインが叫ぶ、フルフルという飛竜は聞いたことがある。

だが

「こんなにでかいやつなのかよ!？」

いくらなんでも異常ともいえる大きさだ、この前討伐したリオレウススの1/5倍ほど大きい。

「こんなに大きいのは私も見たことないよ！いくらなんでも大きすぎる!」

「せせつかく揺れが収まったのに、こ、こいつに、船が、し沈められたら……!」

「そうなる前に！倒す!」

俺は背中^の太刀を抜き突っ込む。

だがそれを察したのかフルフルはこちらを向き、姿勢を低くして尻尾を地面につける。

フルフルの口の中で稲妻が爆^はぜる。

「あ、危ないっ！」

デリオが俺の鎧の襟を掴み引き寄せる、次の瞬間フルフルの口内の稲妻は三方向に広がって地面を這う。

その軌道にはさっきまで俺が立っていた所も含まれていた。

「ありがとう、助かった！」

「そそんな事より・・・こ、こんなの当たったら・・・」

先ほどの稲妻　電気ブレスの進行方向を見ると、酒の入った樽が中身ごと蒸発していた。

「デリオは後ろに回りこんでくれ！セレインはそこから援護を！」

「わ、わかった」「ここに居たのも無駄じゃなかったわね、ニヤハハ」

作戦を伝え俺は正面から突っ込む、攪^{かくらん}乱が目的だ。

電気ブレスは確かに強力だが放つ前の予備動作が大きいようだ、十分にかわせる。

上からセレインの矢が飛ぶ。

弓は《クイーンブラスター》のままだが矢の先に薬品をつけている、弓使いの戦闘法の一つで今は相手の体に毒を流し込む《毒ビン》を

使っている。

デリオは前に使っていた《ナイトスクウィード》を強化した《ランパート》と言う砦の形をした盾が印象的な槍で腹を突く。

俺もフルフルまでたどり着いたが、その時には既に尻尾をつけて頭を下げていた。

「クッ！」

俺は横の方へ飛ぶ、電気ブレスをかわせるかどうか微妙なところだ。

「うわあああ！」

だが予想していた電気ブレスは来ず、予想していなかったデリオの悲鳴が聞こえる。

フルフルを見ると全身に電気を纏っていた、体内で発電した電気を体の外に漏れるほどの電力で放つ技 体内発電だ。フルフルの技で一番威力が高いと聞いたことがある。

デリオはそのまま倒れた、感電と痛みで体が動かないようだ。

「デリオ！」

叫んで安否を確認する、うまく喋れないようだ唇が動いていたので気を失ってはいない様だ。

助けなければ思い、走り出そうと立ち上がる。

「アイン君！駄目っ！」

セレインの声を聞き、フルフルの方を見る。

どこまでが首でどこからが頭か分からないが、首（または頭）を伸ばし口を天に掲げる様に上に向けている。

ギョオオオオオオオオオオオ！！

そして聞こえる、歪^{こひ}な咆哮。

うるさい、怖いなど普通の飛竜の咆哮に対して抱く印象を超越している。

手で塞いでいるのに耳が痛い、鼓膜が破れてしまいそうだと上を見るとセレインも耳を塞いで動けないようだ。

フルフルは吼え終わると再び体内発電の姿勢に移る、もちろんデリオはまだその下だ。

まだ耳が、その奥の脳が痛くて動けない。

（間に、あわない・・・！）

フルフルが姿勢を低く、これが終わればデリオは・・・！

その時、目の前を黒い影が横切った。

リーネだ、と思った時には既に彼女はフルフルの体の下に潜り込んでいた。

リーネは間一髪でデリオを突き飛ばし、体内発電の範囲外に押し出した。

「ああああああ！」

しかしリーネは逃げ切れず、デリオの代わりに体内発電をうけてしまった。

その7：白き稲妻（後書き）

すいません、最近忙しくあまり書けていないので途中で切って投稿いたしました。

その8：稲妻散って二人旅（前書き）

時間を置いたので文体が変わってしまっているかもしれませんが・・・

その8：稲妻散って二人旅

怖かった。どうしようもなく怖かった。

旅をしている時も普通のモンスターならともかく飛竜の相手だけは出来なかった。

あの時、幼くしてリオレウスの恐ろしさを目の当たりにした私は、飛竜の前だと条件反射のように体が動かなくなる。

今回もそのせいで戦列から離れていた事が幸いし、私は吼え声に耐えられる位置にいた。

それでも、それだけでなくとも体は動かないはずなのに仲間が危ないと思うと勝手に体が動いていた。

その後はほとんど覚えていない、けど

大好きな人の、叫ぶ声が聞こえた気がした。

「リーネツ！」

叫び、駆け出す俺。

まだうまく音が聞こえない、だがそんな事はどうでも良い。今動かなくて、何時動く　頭の中はその思いで一杯だった。

「あいつ・・・また！」

セレインが呻くように言う、フルフルは三度体内発電の姿勢に入った。

セレインも矢を放っているが止まらない、俺もまだ間に合わない。

だが、その時

「う、うああおおおおお！」

デリオがほとんど気合だけで体を支え、立ち上がった。そのまま、さきほどリーネがしたように（人物は逆だが）突き飛ばし割って入る形になる。

「デリオ！」

このままじゃ同じことの繰り返しになる、そう思った。

「うあああああ！」

だがデリオはその予想を見事に裏切り、悲鳴を上げながらもランスの大盾で電撃を防ぐ。

（槍は手放していても盾は手放していないっていうのが、どうにもデリオらしいよな……）

思ってから気付く、状況が変わった事で苦笑する余裕が出てきたようだ。

そう、デリオもリーネも助かった、ここからは反撃の時間。

「おおおおおおお！」

今度こそ、俺は斬りかかる。

そして切り口より発火、もがいてもなお消えぬ炎はフルフルをさらに苦しめる。

これが【火竜刀・紅葉】がリオレウスの素材を使っている理由だ、

火竜の発火器官とそれに耐えうる甲殻が成せる「火属性」の攻撃がこの太刀最大のウリだ。

しかしフルフルも黙って斬られるわけではなく、反撃を試みた。その不気味な顔のついた首を伸ばして噛み付いてくる。

だがその程度の反撃は予想通りだ。

あえて言うなら吼える時に首を伸ばしたのが命取り、ハンターとは状況と情報から推論し学習する生き物なのだとモンスターには分からないらしい。

「う、ごめん、僕、槍、落とした、から・・・」

「ああ、後ろでリーネを頼む！」

回避しながらデリオと会話する、情報を伝え合い多数で戦闘できる事もハンターとしての強みだ。

デリオがさがる時間を確保するために俺は太刀を振るい続ける。

「はあああああ！」

自分に気を引きつける事を第一に考えて頭部を執拗に狙い続けた。だがそれだけに気を取られすぎたようだ、いきなり回転したフルフルに対応しきれず、尻尾によって俺は吹き飛ばされた。

「ぐっ・・・！ちくしょっ！」

いまさら大したダメージでも無いしすぐに体勢を立て直した、問題は距離が離れた事だ。

フルフルがリーネに飛びかかろうとする。

本日何度目か知らないピンチ、だがフルフルの思惑はセレインによって打ち崩された。

威嚇射撃というやつだ、フルフルの鼻先をかすめるように矢を放ちそれによりフルフルが怯む。

（ナイス、セレイン！）

心の中でセレインに感謝しながら俺は走る、既に体中は練気で満たされている。

「食らえええええええ！」

雄叫びと共に太刀を奴の口の中に刺し込む。

そして力任せに上に引き裂くとフルフルの口の上部分は縦に裂けた。さらに練気を解き放ち、鬼刃斬りを繰り出す。

袈裟懸けに斬りかかる、口は斜めにも切れて歪な×マークのようだ。さらに《次の型》に繋ぎ、型にあるとおり踏み込みながら下げた太刀を跳ね上げる。

フルフルは喉元を裂かれ歪な悲鳴を微かに上げるが、そんな事は気にせず最後に繋ぐ。

「これで、とどめだっ！」

さらに踏み込んで大きく斜めに薙いだ太刀はフルフルの腹を断ち、命を絶った。

最後にもう一度踏み込んだ俺の後ろで、フルフルが横に倒れた。

[illegible]

「本当にすいませんニャ、ハンターさんにお手数かけさせてしまっ

た上にこんな事に・・・」

陸地に降り立った俺たちに二足歩行の猫　アイルーが話しかけてきた、あの船を動かしていたのはこいつ等らしい。

その後、フルフルを倒したのだがそれでも船は転覆しそうになり、近くの海岸に着岸することになった。

その時、アイルーが伝書バトで町へ連絡して馬車を送ってもらったのだがこの人数だと二人ほど乗れなくなるらしい。

戦えない船員をこんな所に残す事は出来ないので相談した結果、まだ意識の戻っていないリーネとこの中で一番強いセレインが馬車に乗る事になった。

馬車に乗るとはいえ危険は多いのだから護衛は強い方がいいし、もしリーネが電撃により体に何らかの障害が残っていたら（考えたくないが）旅をする足手まといになる。

「本当にすいませんニヤ・・・・・・・・」

「別に大丈夫だって」

この世の終わりを自分が引き起こしたと言っぐらい申し訳なさそうな顔をするアイルーに向かって、俺は苦笑した。

「せめて地図と食料ですニヤ・・・・もって行ってほしいですニヤ」

「あ、ありがとう」

デリオがそれらを受け取り、俺の横まで来る。

「じゃあまた街でな、セレイン！リーネを頼んだぞ！」

「まっかせなさい！グラビモスがきたって追い返してやるわよ！」

ちなみにグラビモスというのは火山に生息する最大級の飛竜でほとんどのハンターが避けて通りたがるような存在だ。

まあ、それよりも本当に一人で追いついて追いつかないようなセレインの方が怖いわけだが。

船上での狩り、二人旅、波乱だらけの始まりだ。

だがこれは本当に「始まり」に過ぎないのだ………

その8：稲妻散って二人旅（後書き）

私生活の問題でなかなか書けません・・・もう一つの小説に至ってはほぼ放置状態・・・。

こんな状況ですが皆様の暇潰しにでもなれば幸いです。

その9：幼き射手（前書き）

ものすごく久しぶりの更新です。

見てくれている方、申し訳ありませんでした。

一応受験生なものでしばらく執筆を控えておりましたが一段落したので戻ってまいりました。

これからも更新速度が落ちるかもしれませんが是非よければ最後までお付き合いください。

その9：幼き射手

俺は走る、隣に居るデリオも走る。

俺たちは逃げているのだ、いや正確には誘き出し^{おび}ている。

俺の武器は太刀でデリオの武器はランス、どちらも入り組んだ場所で振るうには適さない武器だ。

だから向こうから出てきてもらう、枝の多い密林地帯ではなく好きな様に戦える丘の方へ。

「さあ、出てこいよ！やりたいならいくらでも相手になってやる！」

丘にたどり着いた俺が叫びをあげたとき、後ろから衝撃が来た。

やつが空から落ちてきた 飛び上がったきたのである。

桃色の体に太い四肢、長い尻尾は物を巻きつける事に長けていて、現に今も尻尾に光る鉱石が見える。

全体的にファンシーな感じだが目つきは鋭く、全身の雰囲気台無しだ、だがそれこそ彼が野生のモンスターだという証。

彼の名は、ババコンガ。

ブオオオオオオオオ

これは雄叫びではない、屁である。

「デリオ！ <消臭玉^{しょうしゅうだま}>は用意してるよな？」

「う、うん」

<消臭玉>とは奴の屁の臭いが体にまとわりついた時、臭いを落と

すために使う。

そんなことは後でいいとハンターではない人は思つかもしれないが、あの屁の臭いは臭すぎて飲み薬などが喉を通らなくなるのだ。

グオオオオオオオ！

アイテムの確認をしていると、今度こそ本当の雄叫びを上げながらババコンガが突進してくる。

体の大きさは飛竜に劣るがその筋力はなかなか侮れない、当たると鎧を着ていても危ないだろう。

俺はババコンガの突進経路に斜めになるように立つ。
タイミングを見計らい、そして後ろへ飛び退く。

その後ろに下がる力を利用して、横薙ぎに鼻っ柱を斬りつけてやった。

グオオオウ！

驚きと痛みにババコンガの突進は止まる、そしてそれは絶好の隙となった。

後ろに控えていたデリオがそのまま頭を突く。

頭蓋を貫通とまではいかなかったが、頭にある毛が散った。

「や、やった！」

「いや・・・跳べ！ デリオ！」

俺の言葉に従い、デリオが飛び退く。
バック ステップ

その瞬間、ババコンガは屁を放った、デリオがさっきまで居た位置も範囲内だ。

「こいつ・・・キレたか」

ババコンガの顔は真っ赤になっている、本当に怒っていることが分かりやすいモンスターだ。

そしてそのまま、さっきよりも機敏な動きでババコンガは飛び上がる。

そしてそのまま、落下。

「ちっ！」

俺は地面に飛び込むようにして避ける。

後ろを見ると、奴が落ちた地面は陥没していた。

軽く恐怖を感じながらも俺は奴へ斬りかかる、この瞬間は隙が大きいかからだ。

「だ、駄目だ！」

デリオの言葉を聞いたときにはもう遅い、隙があると過信してキレた時のスピードを見誤ってしまった。

眼前に奴の顔、自分の顔は来たる衝撃を思い歪んでいただろう。

身を捻った、太刀をかざした、防げるかどうかは運次第・・・・・・・・いけるか？

ババコンガの腕が振り下ろされる、その瞬間・・・・・・・・

ターン

火薬の臭いと風を切る音が遠くから流れてくる。

前を見るとババコンガは俺から興味を失ったように後ろを向いている。

訳が分からずデリオの方を見ると、近くにある洞窟の方を指差していた。

奥の方は暗くて見えないが銃身があるのが分かる、さっきの音はこれか。

ターン、ターン

繰り返し弾が放たれる。

しかしあまり効いていない様で、ババコンガは業を煮やしたように洞窟へと走る。

「お、オイ！ 危ないぞ！」

顔も知らない相手に忠告をする、が

ターン

「大丈夫」

銃声と共に次は声が返ってきた、まだ若い女の声だ。

何が大丈夫だ、そう叫ぼうとしてババコンガの動きが止まっている事に気付いた。

「す、睡眠弾・・・？ で、でも即効性が・・・」

「いや、麻酔弾だ。知らないか？」

デリオの疑問に答えたのはさっきの声だ。

俺達の大団には、捕獲依頼の時にギルドから支給される手投げの「麻酔玉」があるが

弾丸まで作られているなどは知らなかった。

「とりあえず依頼達成、後はギルドがやってくれる」

洞窟から現れたのはまだ年若い少女だった。

小さな体に不似合いな大型砲を携えている、マカライト鉱石の機構をバサルモスの甲殻で覆った《ロッキーター》というヘビィボウガンだ。

「えっと……どういうことなんだ？」

本当に訳がわからないので質問する、俺はデリオと二人だけで依頼を請けたはずだ。

「詳しい話は村で……、帰りましょう」

少女の言葉に従って俺達は狩場を後にした…

海岸で二人と別れたあと、俺とデリオは街へ向かって旅を続けていた。

しかし、メラルーに食料を渡されていたとはいえ路銀は簡単に尽きてしまい結果、立ち寄った村のギルドでババコンガの討伐依頼を請けたのだが……

「で、説明してもらおうか」

いきなり目の前の少女が現れたのである。

ここはギルドだ、俺達は軽食を取りながら話を聞いている。

「そのつもり、私の名前はメルトラ。仲間とはぐれたの」

「狩場か？」

「うっん、村でなんだけど……」

そこでミルクを口に含むメルトラ、俺達も一旦食事を再開する。

「オジサマは優秀なハンターで、頭も良くって、とても良い人なんだけど……」

「正義の味方」体質なの……」

オジサマと言うのははぐれた仲間の事だろう、それよりも気になった言葉がある。

「正義の味方体質ってなんだ？」

「困った人や大変な事を見ると絶対に手助けするの、後先考えず、周りを気にせず」

今まで無表情だったメルトラが少し恥ずかしそうに顔を伏せた。

「……急ぎの依頼があつてお前のことを忘れて行ってしまった、とか？」

半分冗談だったのだがメルトラは顔を伏せたまま頷く、どうやらピンゴらしい。

「でもそれならどうしてあんな所に居たんだ？依頼の重複なんてギルドはやらないし……」

「それはね、実力を見せておきたかったの」

「え？」

「この先の街まで行く事は知ってる、そこまで送って欲しいの」

その9：幼き射手（後書き）

長い間まともに書いていなかったなので文体が変わっているかもしれない
ません……。なんだかこんなことをよく言ってますね……

更新を待っていてくださった方、ありがとうございます。

その10：そしてそこは銀世界だった（前書き）

受験生なら勉強優先なんてお決まりをぶち破って投稿です。
ちゃんと勉強もしてるんですよ、あはははは・・・・・・

メルトラはまだ明かせない事があるので紹介はまた今度です。

その10：そしてそこは銀世界だった

メルトラが「送って欲しい」と言ったのはつまり、俺達とパーティを組みたいという意味だった。

「私、射撃担当だから一人だとあまり上手く戦えない、それに・・・」

「それに？」

「この先の道が土砂崩れで塞がってて・・・もう一つ道はあるんだけど危険らしいの」

なるほど、確かにガンナーだけで難所に行くのは難しいだろう。俺達としてもセレインが抜けてガンナーが居ない、嬉しい申し出だった。

「でもさ、オジサマとやらを待たなくてもいいのか？　すぐ帰ってくるんじゃない？」

「大丈夫、直接依頼を請けるのは別の村でそこからなら街の方が近いの。」

いつもこんな事があつたら近い方に行くから・・・」

「いつも」ということはこんな事は多いのだろうか、この娘も苦勞人だな。

「じゃあ宿へ行こう、一軒しかないから貴方達も同じだね？」

そう言つて立ち上がった刹那、メルトラがヘビィボウガンの重さに耐え切れず後ろへ傾く、

「……いまさらだがこの娘、なんでヘビィボウガン使ってるんだ？」

馬車から降りると、そこは白銀の世界だった。

「うゝ、寒いゝ、別ルートがこんな所なんて聞いてないぞゝ」

寒い、とてつもなく寒い、容赦なく寒い、これでもかと言うほど寒い。

「しし、し仕方ないよ、こゝこの道ししか、な、なないんだもの」

デリオの声の震えはどもりだけが原因じゃないだろう。

あの後、一泊した俺達は装備を整えて「別ルート」とやらの踏み込んだ。

するとそこは雪山だったのだ。

俺達が滞在していた村は気候帯の境目にあつたらしく、街に向かうには気候帯に沿って行けばいいのだが、その道が塞がっているので気候帯を跨いだという訳だ。

「飲んでおいて、少しは楽になるはず」

メルトラがビンを放つてよこす。

ホットドリンクと言う内側から体を温めてくれる飲料だ、これを飲めば10分ぐらいは寒さを防いでくれる。

しかし海辺のモンスター、ダイミヨウザザミから作られた《サザミシリーズ》を纏った彼女は赤髪と相まって暖かそうに見える、見た目だけだが。

「サンキュー、メルトラ」

飲み干してからそう言つとメルトラは表情も変えずに

「メルで良い、緊急時はそっちの方が便利」

と言つてきた、これからはそう呼ぼうと思う。

山頂を目指す途中、洞窟があつたので俺たちはそこをぐる事にした、繋がっていない可能性はあつてもいきなりロッキライミングよりは大分ましだ。

「いくら普段使われていない道だからって……地図も無いとは、な！」

岩場に飛び昇りながら話し続ける。

「いえ、その他にも理由はあるんです」

既に昇りきっているメルから声が返ってきた。

「村で言つた危険つてやつか？」

「うん、ここにはね昔の生態系を残した飛竜が出るんだって」

「古龍ってやつか、それなら勝つ自身なんて無いぞ？」

古龍とは既に滅びた前文明から生態がまったく変わっていない、半分伝説上の生き物だ。

自然を操り、圧倒的な力を持つ彼等はギルドでも最近実在が確認されたばかりで俺達みたいな「新米卒業」レベルが手を出して良い存在じゃない。

「ううん、もうちょっと新しい、飛竜よ、「ティガレックス」って言うらしいの」

「ふーん、とりあえず要注意だな…….…….お、敵がいるぞ」

俺の視界に入っただのはブランゴという白くて少し大きいサルのようなモンスター、それが3匹だ。

雪山では比較的強い部類のモンスターだが強敵クラスではない雑魚なので楽に対処できるだろう。

「いくぞ！」

わざと大声を上げて俺はやつらに走り寄る、俺のほうへ引きつけてメルを危険に曝さないためだ。

ガンナーは遠くから弾丸で攻撃できる代わり、近づかれると最も脆いのが特徴とも言える。

こちらで上手くフォローしないといけない。

ターン

メルのロッキーターから放たれた弾丸は正確にブランゴ一匹の額を穿つ。

撃っているところを見て初めて気付いたが、彼女はヘビィボウガンの重さを生かして上手く反動を殺している。

（武器は体格だけで選ぶもんじゃないって事か・・・）

ハンターとして感心しつつ、俺は速度を落とさず一体に向かって駆ける。

隣ではデリオも別のブランゴに向かって突進している所だ。

「うおおおおお！」「はあああああ！」

同じタイミングで俺は太刀を鞘から振り抜き、デリオは鋭い穂先を突き立てる。

振り下ろした太刀は肩口から一閃、そのまま振り抜いて喉に刃を突き立て切り裂いた。

ブランゴは地面に力無く倒れ、俺は血の付いた刀身を籠手で拭う。デリオの方もブランゴを壁に縫い付けるように貫いていた。

「ふう、思ったより楽に済んだな。デリオもメルもご苦労さん」

「はい、先を急ぎま・・・」

メルの言葉が、そこで止まる。
視線は俺の後ろを向いていた。
振り返る、そこには、白い悪魔。

（ドド　ブランゴ・・・）

迂闊だった、下っ端のブランゴが居るならばそれを束ねる長、ドドブランゴが居てもおかしくは無い。

気付いた時には間に合わず、俺はやつの突進をもろに受けていた。

「がつ……！」

そして、落下感。

どうやら崖のようになった所から足を踏み外したらしい。

手を引っ掛けようにも俺の上にはドドブランゴが覆いかぶさる様にしている。

「くっそ………」

「アインさん!」「ア、アイン!」

二人の声が聞こえるが俺にはなす術などなく、

崖の向こうに、ただ落ちて行くだけだった……。

その10：そしてそこは銀世界だった（後書き）

執筆をしていない間に色々と考えたんですが僕の小説にはヤマが足りないと思います。

それで今回はこんな展開です、戦闘を上手く書けるよう頑張ります！

その11：煌めく砂漠、光る湖面、輝くハゲ頭（前書き）

どうもすいません、また一週間以上空いちゃいました。

今、友人たちとゲーム作ってるんですよ・・・パソコンのゲーム・・・。

そんな訳でさらに更新遅れるかもです・・・・・・・・・・

申し訳ありません・・・。

その11：煌めく砂漠、光る湖面、輝くハゲ頭

輝く銀世界で、アイン達が戦っている時、彼女もまた、光り輝く場所に住た。

まあ、気候は程遠いのだが。

「ぶえっはー！ あつついねー、リーネちゃん！」

「暑い、暑い言わないでください・・・・・・・・言っただけ気温が上がります・・・・・・・・」

前略、お元気でしょうか、母上様？ あなたの娘は今、砂漠で軽く脱水症状です。

とまあ、現実逃避気味に架空の手紙なんか書いてないで状況を整理しよう。

船での一件により、私はしばらく気を失っていたらしい。

雷撃を受けたにも関わらず、私は五体満足だ。

それは良い、それは良かったのだが・・・・・・・・問題なのはアイン達と離れてしまったことだ。

運命の女神様は私の事が嫌いらしい、今でも親の仇を見るような目で睨んでいる事だろう。

アインについて行くために大陸に来て、肝心の彼とは離れ離れた。とりあえずセレインさんは中央のギルドにつけば何とかなると言っていたが・・・・・・・・

「あゝつゝいゝ、りゝネちゃんゝ、なんかアレ、ファンタジックに氷の魔法！とか無いゝ？」

「そんなファンタジックな世の中なら絵本や英雄譚は流行りません」

「辛辣しんらいゝ、もつと可愛いツツコミをプリゝズゝ」

こんな状況だ。

途中まではアイルーたちの馬車に同席したのだが、彼等は彼等の生活があり、

送ってもらえたのは行程の半分もいかない村までだった。

そんな訳でこの前の「護衛」と同じ要領で雇ってもらったのだが

「砂漠って・・・よりによって砂漠って・・・」

そう、煌めく灼熱の大地、砂漠だ。

暑い、暑い、暑いなんてものじゃない。

同じハンターの狩場なら「火山」なんかはもつと暑いらしいが、砂漠の時点でもう無理だ。

暑さを和らげる「クーラードリンク」という飲料を持っているが、これはモンスターに襲われた時に飲まないといけない。

体力を過剰に消費する戦闘で、この暑さは辛い。

身を伝う汗は集中力を奪い、照りつける陽は体力を奪い、最終的には命を奪う。

そんな訳で使うわけにはいかない。

私とセリンさんは馬車の天蓋てんがいの下、すずめの涙程度の役にしか立

たない影で、体力を温存している。

「それにしても・・・砂漠でも休める影の一つ二つはあるもんだけどね・・・」

大当たりの大はずれだよ、にやはは・・・」

いつも通りの笑いにも元気は無く、馬車の端で溶けそうになっているセレインさん。

まったく影が無いからここまで休まずに、馬車は旅程を進めている。

「普通はここまででもないんですか？」

「景色を楽しめる程度には楽だよ・・・にやはは、暑いのは苦手」

そんな感じに会話をしていると、ふと地平線に違和感を感じた。今まで陽炎かげろう以外は平坦だった地平線が、少しもり上がっている。

「えっと・・・もしかして、岩陰？」

「おっ！　みたいだね、オアシスとかあれば一番なんだけどね」

セレインさんの言葉に「そう都合良くはいきませんよ」と返す。

そうしている内にも、地平線は近くなっていた。

「・・・・・・・・まさか・・・本当にセレインさんの言う通りになるとは・・・」

ただの岩陰だと思っていたそれは、実は洞窟への入り口で・・・

さらにその洞窟の奥に地底湖があったのだ。

「きもちいいにゃ」「くらくだにゃ」「ちめたいにゃ」

馬車を管理する業者であるアイルー（船の時とは別の人？だ）達もくつろいでいる。

「こんな都合の良い事って・・・アイルーさんたちも知らなかったみたいだし・・・」

「にはは、一流のハンターとしては運も必要だよ」

もはや運ってレベルじゃないと思うんですけど・・・。
まあ、そんな嬉しい偶然に感謝しながら水を口に含み

「ところでさ、リーネちゃん？」

「？」

「アイン君とどうなの？」

吹いた。

「っていきなり何の話題ですかぁ！」

「いや、まあ、女の子としては他人の恋愛事情は気になるものなのですよ」

駄目だ、完全に分かっているみたい。

「はあ、伝わるように色々してるんですけどね。駄目ですよ、朴念仁ですよ」

「ふうん・・・ま、大変だね。」

何かあったらオネーサンに相談しなさい！ リーネちゃんは今実の娘のように・・・」

「あ・・・妹とかじゃないんですか」

空気が　　というかセレインさんが凍った。

「あ、はは、うふふー、年齢^{とし}、ちょっと、ばれちゃったー、あはは、うふふー」

「だ、大丈夫ですよ！ 子供産んじやうような年齢でもまだ若いですって！」

「うふふ・・・リーネちゃん。女はね、子供を産んだら一気に老けるよ・・・」

「あ、お子様いるんですか・・・？」

私の次の言葉で、セレインさんは完全に砕け散った。放心状態だ。

（うわー、嬉しくない氷の魔法、使えちゃったー）

ズガアアアアン！

その時、外で轟音がした。

何か重い、とても硬いもので岩を叩いた音だ　　と思う。

「セレインさん！　様子を　」

「あはは、うふふー、ごめんねー、ママ、一人で旅に出ちゃってごめんねー」

「ああ、もう！　肝心な時に役立たず！」

彼方にいる息子だか娘だかにに語りかけるセレインを無視し、洞窟の外へ向かう。

そこで見たものは

「くはははは！　この程度のモンスター、屁でもないわぁ！」

頭がへこんで倒れ付す首領砂竜^{トスガレオス}、

そして太陽を照り返す、ハンマーを持ったスキンヘッドだった。

その11：煌めく砂漠、光る湖面、輝くハゲ頭（後書き）

はい、今回はリーネ視点のお話です。

パーティを二つに分けたのは新キャラが出したかったのが一番の目的ですのでこっちの視点も書いてます。

今回はギャグが多めですが・・・自分のユーモアセンスは微妙なのでギャグになってないかもですね（笑）

その12：再び雪山、一対一（前書き）

えっと………前回の更新から一ヶ月近くたってしまいました・
・・。

戦闘描写を考えているうちにテスト期間に入り、その後もごたごた
していて……すいません。

パーティが二つに分かれているので、これからも交互に物語が進ん
でいくと思います。

その12：再び雪山、一対一

場所は雪山、時間はアイン達が来る10日前、そして彼等は……

「……機器全て順調、問題は見受けられません……しかし、大丈夫でしょうか？」

白衣の男、そのうちの一人が呟く。
近くには、彼らが物と思われる寒冷用装備マフモノが無造作に脱ぎ捨てられている。

「大丈夫か、とは？　今回はただの実験だ、遺跡は痛いが村の一つや二つ構わんよ。」

完成すればいくらでもやり直せる」

冷酷で、単調で、どこか平たい声が、「施設」に一番近い男から発せられる。

その「施設」は、この世界のどこでも見かけられないような物だった。

様々な色を見せ、そして映るものが変化するガラス。

磨き上げた大理石よりも、光る湖面よりも美しい床や壁。

肝心の施設には、よく分からないでっぱりが多数あり、不思議なガラスの数も一際多い、

そして……

グウウウウウルウウ……

縦に長い水槽に鎮座するそれ。

「しかし・・・不気味ですね。今までの遺跡とは全然違う物ばかりじゃないですか。

それにこの技術・・・触れても良いものなんでしょうか？」

「あるからには、我々の祖先は使っていたのだろう。

今更怖気づくな、何のためにこいつの討伐をハンターに依頼した
と思っっている」

「す、すいません。・・・起動は10日後に設定致しました」

それはアイン達の来る10日前の出来事。

静かに、静かに、水槽の中の赤銅色は出番を待っていた・・・・・・。

鎧を着ているにもかかわらず、腹には鈍痛が残っている。

だが、その痛みが俺の意識を繋ぎ止めてくれていた。

「くっそ・・・・・・こんな簡単に死んでたまるかよっ！」

声と共に渾身の力を込めて、俺の上からドドブランゴを引き下ろす。
しかし、地面まで あと3メートル。

（間に合うか・・・！）

重力に逆らうために、俺は全力でドドブランゴの腕を掴み、自分の
体を持ち上げる力を入れる。

その努力は功を奏し、あと1メートルという所でドドブランゴは俺

の座布団になっっている。

「しっかり、受け止めるよ！ 俺の代わりにな！」

地面に、激突。

グオオオオオオオオ！

俺も肺が壊れたかと思うほどの衝撃があつたが、奴のダメージはそれ以上のはずだ。

ドドブランゴはまだ動かない、今の内にと思つたが俺もよろよろと歩く事しかできなかった。

腰の部分を探り、《回復薬》を一気に呷るように飲む。

肺の違和感は消えていき、腹の鈍痛が緩やかに引いていく。

しかし・・・

「やっぱり、そううまくはいかないか」

見てくれるのはたった一人 いや、一匹だがそれでも肩をすくめる。

ドドブランゴが立ち上がっていた、ダメージはあるだろうが致命的ではなかったようだ。

グオオオオオオオオ！

吼える、奴の雄叫びには手下のブランゴを雪の下から呼ぶ効果があるらしいが、ここは洞窟内なのでさすがに駆けつけられないようだ。そして、洞窟のこの空間にモンスターは一匹も居らず、ここと外界を繋ぐ場所は、上しかなかった。

「久しぶりの一対一か……勘が鈍ってなけりやいいけどな・
・・！」

ブランゴとの戦闘後、一度収めていた太刀を抜き放つ。
敵も臨戦態勢に入り、正面から向かい合う形になった。

勝負は一瞬、と東方のサムライのようにいけば楽なのだが、如何せん自分とモンスターとは体力も腕力も膂力も違いすぎる、慎重に戦わなければ。

グオオオオオオオ！

先に動いたのはドドブランゴだった、地面の氷を掴み、固め、雪玉のようにして投げてくる。
その数、4。

「くっそ！」

間を抜ける方法もあるがリスクが高い、横に倒れこむようにして跳ぶ。

鎧越しに衝撃と、氷の冷たい感触が伝わってくるが今は無視だ。
そのまま転がるようにして奴との距離を空ける、ただ的になるつもりは無い。

グオオオオオオオオ！

再び雄叫びを上げるドドブランゴ、鼓膜が震え、生理的に身が竦みそうになる。

それを抑え立ち上がる。

「はっ……はっ……はっ……やっぱ、一人は辛いな」

誰ともなしに呟く、やはり久々に一人で狩ると辛く感じる。
しかし、敵はそんな事もお構い無しに走ってきた。

「いつまでもやられっ放しでいられるかよ！」

再び回避　そう思わせるフェイントを入れて、先ほどの位置から
5歩の位置で踏み止まる。

そしてタイミングを合わせ、そのまま横薙ぎに太刀を振る。

ギャアアオオオオ！

俺が反撃できると思っていなかったのか、大仰な叫びを上げるドド
ブランゴ。

その隙を見逃せるわけが無い、体の向きを変え、踏み込み、雄叫び
を上げ、斬りかかる。

突き、振り上げ、振り下ろし、子供の頃から師匠たるハンターに仕
込まれた型は基本にして単純な物。

だがそれ故に汎用性があり、どのような体勢からでも放ちやすい利
点がある。

斬る、斬る、斬る、斬激の嵐が白い毛皮を包み込む。

振るった腕が、支えた腰が、踏み込んだ足が、全て疲労を訴える。
だが、これで戦況有利だ。ここから巻き返……………

ガアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！

声が聞こえた。叫び、音による圧倒的な暴力。

目の前のドドブランゴではない、奴も今の声に驚き辺りを見渡して

いる。

「チッ、これ以上状況が悪くなったらどうしろっていうんだよ・・・」

「

今度こそ誰も見ていないが悪態をつく、これ以上来られたら本当にヤバイ。

だが、この音はおそらく強敵だ。

フルフルの聲が生ぬるいと思える轟音、振動が身を揺らす、聴覚の蹂躪。^{じゅうりゅう}

そして次の刹那、脱出不可能のはずの岩盤が、いとも簡単に、崩れ去った。

その奥にはよく分からない部屋があるが今はそれどころではない、目の前のこれが問題だ。

野生そのものの雄々しき体躯、ヒレにしか見えない様な翼とその大元である太い腕、

体勢を低くしているその姿はファイティングポーズを彷彿とさせる。

ここにはね昔の生態系を残した飛竜が出るんだって

メルという言葉が脳裏をよぎる。

この圧倒的な野生、存在感、脅威、こいつが

「ティガ・・・レックス・・・」

呆けている俺を余所目に、ドドブランゴが果敢にも立ち向かっていく。

しかし、いとも簡単に邪魔だとも言う風に踏みつけるティガレックス。

喚いても騒いでも放さず、最後は頭部を噛み千切られて絶命した。

「・・・・・・・・マジかよ・・・」

確かな野生は、確かな敵意を持って、俺へと近づいてきた。

その12：再び雪山、一対一（後書き）

久しぶりだけどやっぱり短いです、戦闘が長く書けないのは欠陥ですよね・・・アハハ・・・。

ドドブランゴは完全に噛ませ犬になってしまいました（笑）

その13：そして現れた謎の飛竜（前書き）

どうも、お久しぶりです。

恐怖の冬期講習in塾が終了し、小説を書き始めたんですが……会話が多くなる……。

何度か手直しするうちにこれだけ時間が過ぎてしまいました、一応形にはなりましたが上手く書けていないかもです。

4月までは更新が遅れがちになると思いますが、よろしく願います。

その13：そして現れた謎の飛竜

ここは砂漠の最奥。

長い砂漠の道のりを越えた後、岩と岩に挟まれた空間を発見するかここに至る道は無い。

少なくとも、人間には。

そしてそこに在るのは電脳と金属と知識の部屋。

この場所は、一部の人間に「遺跡」と呼ばれていた。

この場所は、遙か太古よりここに存在する。

この場所は、生命を弄ぶためだけに造られた。

そして　この場所は、再び動き出した。

「にやはは、こんな所で会うなんて奇遇だね」

「おう！　一人旅になるかと思っていたが、こりゃ幸先が良いわい」

地底湖のある洞窟、そこで小さな祭が開かれている。

真ん中にいるのはセレインさんと………さっきのスキンヘッドさん。

「美味しいニャ」　「満腹ニャ」　「食料大開放ニャ」

アイルーの人たちも思う存分くつろいでいる。

平和だ。

限りなく平和だ。

「じゃ無くて！ どうして酒宴しゅゑんやってるんですかあ！」

あのスキンヘッドさん、名前はレオニア・ブラウンドというらしい。少なくとも中級者以上の腕があるこの男性、セレインさんの知り合いだと言っている。

あの底が知れない女性ハンターは、やはり人脈の面でもすごいみたい。

うん、それは良い、この人がすごいのはつくづく身に染みている。問題は

「どうして！ こんな所で！ お酒なんか飲んでるんですかあ！」

この人たち、合流したら前触れもなくナチュラルに酒宴始めやがりましたからね。

「いやいやリーネちゃん、大人のお付き合いにお酒は必須だよ？」

「そうだそうだ！ こちとらしばらく水も飲んでねえんだ！」

「この駄目人間め……………！」

そのくせ酒には強いみたいで頬が赤くなるだけで全然酔ってなかったりする。

「まあまあ、リーネちゃんも一杯！ ハンターの円滑なお付き合いにもお酒は必須だよ？」

「いりません！ ていうか私はハンターじゃありません！」

「で、レオ。どうしてこんな所でこんな事やっているか教えてくれる？」

「まったく、もう少しゆっくり飲んでも……すまん、すまんかったセラ」

飲み続けるレオニアさんを、セレインさんは一睨みで黙らせる。二人とも愛称で呼び合っているし、仲良しみたいだ。

「いやまあな、この近くの村がモンスターに襲われていると聞いてきたんだ」

「近場のハンターが処理するだろうに……悪い癖よね、正義の味方が話が始まったけど全然口を挟む余地がない、というか挟める知識も無い。

大人しくアイルーと遊んでおく事にする。

「困っている人を助けるのは当然だ、メルならば一人でも街に行けるだろうしな」

「……………ちょっと待って、メル放ってきたの？ ていうかメルを連れてるの？」

「当然だ。修行を頼んだのはお前だろう？」

「いやいや、私は全然何も……あの子、またそういう嘘を……！」

「なにい！ アレは嘘だったのか！？」

「いい加減慣れなさいよ！ 何回騙されてるの！」

なんだかアイルーのお腹を撫でているうちに口論になっている。
とりあえずアイルーが気持ち良さそうなので撫で続ける。

「……………はあ、まあいいわ。すぐにメルの家に戻りなさい、
命令よ」

心なしかセレインさんが怖い、普段はあんなに飄々（ひょうひょう）
としてるのに。

まあ関わるのも嫌だからアイルーのお腹を撫で続ける。

「ふにゃあ〜」って声でこっちまで和んでくる。

とりあえず平和だ、レオニアさんは震え上がっているが。

「い、いや、だが！ 俺にも帰れぬ理由がある！」

レオニアさんがしどろもどろになりながらも弁解を始める。

「へえ、それは何なのかな？ くだない事だったら三枚に下ろす
よ？」

「くだらぬ事ではない！ 倒しても倒してもドスガレオスが尽きん
のだ！」

レオニアさんが話した瞬間に、セレインさんが訝しげな顔をする。

私も耳を疑った。

「いやいや……仮にも群れを束ねる首領級^{ドス}なんだし………
生死はきちんと確認したの？」

「かれこれ10体は倒しているはずだ、これでも見間違えているならば引退の時期かもな」

鼻を鳴らして答えているが、内容は深刻なものだった。

ドスランポス、ドスゲネポスなど「ドス」の名を冠するモンスターは群れでの長という意味だ。

群れを束ねる一際強力な個体、飛竜よりは珍しくないとしてもそう易々と現れていいものではない。

それが、何十匹もということは生態系が狂っている可能性もあるということだ。

「始めはドスガレオス六体にリオレイア一体の討伐依頼だったのだ。リオレイアを倒し、ドスガレオスも全て片付けたと思ったら……何頭いるんだ、奴等」

というか元の数だけで十分すごい、一人で請ける量じゃないと思う。

「はあ……ていうかそれはギルドに報告しなきゃだね。

とりあえずヤバイんだつたら私設部隊^{ギルドナイト}を派遣してくれるはずだし」

私も頷く、ギルドの私設部隊^{ギルドナイト}は情報収集を得意とする集団だ。

まあ、裏で暗殺や制裁をやっているという噂もあるが一介の受付嬢には知る余地も無い。

「ふむ、やはり俺一人では無理があるか……分かった、ここは退く。」

となれば、まずは街へ向かうべきだな」

「あつそう……メルは見捨てるんだ？」

再び睨む、再び竦む。

なんていうか話が進みそうに無いのでさすがに口を挟む。

「セレインさん、話ぐらい聞いてあげましょうよ」

「むう、分かった。リーネちゃんの心の広さに感謝しな」

「おお……感謝するぞ、リーネとやら。」

実はな、メルとは街で合流すると話しておるのだ。

ギルドへの報告の件もあるし、やはり街へ向かうのが一番だろう
と思つてな」

と、話をまとめたのが20分前。

灼熱の大地に燃え盛る太陽、アイルーたちの荷馬車はきちんとついてきている。

地底湖に入る前と変わった点は、レオニアさんが加わった事だ。

目的地が同じなので一緒に旅をする事になった、頼もしい。

うん、この状況では限りなく頼もしい。

ギヤアオオオオオオオオオオ！

ほら、こんな状況だしね。

「セレインさん、あれってなんなんですか!？」

荷馬車は走る、逃げるようにというか実際逃げている。

「知らないよ！ 私もあんな飛竜見たこと無い！」

後ろから追ってくる飛竜、姿形はリオレイア（リオレウスの雌めすはこう呼ばれる）に似ていた。

色は砂漠と同じ色、つまりは保護色だ。リオレイアは緑色なので違和感を感じる。

でもここまでは普通だ、飛竜にも色違いの《亜種》と呼ばれる種類が存在する訳だし。

一番の問題点、それは 潜ひそっている事だ。

砂漠を泳ぐように追いかけてくる、その速度は半端ではない。

ドラゴスや角竜などの限られたモンスターは地面の下を泳ぐ事もできるのだが……それらは全て飛行能力を犠牲にした、飛竜という呼び名が似つかわしくないものばかりだ。

でもそいつには翼があった、その下にドラゴスのようなヒレがついているのだ。

体中に背びれがあるものの、それは少し歪いびつに見えた。

「あつはは……速いねえ……。便宜上、ガレオレイアとも呼ぼうか？」

セレインさんも軽口を叩いてはいるが、顔は啞然としている。私もびっくりだ、新種のモンスターなんてこんな時に出てきて欲し

くない。

「ふむ、それでよからう。

よし、追いつかれるのも時間の問題だ。それぞれ準備しておけ」

その中において、唯一レオニアさんは悠然とそいつの背びれを見下ろしていた。

とりあえず、私は厄介事に巻き込まれる才能があるみたいだ。

その13：そして現れた謎の飛竜（後書き）

オリジナルを出しました。

……別に「ヒヤッホウ！ せっかく小説書いてるんだから無駄にオリジナル出しちゃうぜ！」って訳じゃないですよ？
きちんと理屈があって出しました、勢いじゃありません（笑）

その14：激突の赤銅、砕け散る信念（前書き）

なんだかこの更新ペースが根付いてしまいました、元々他の方のより短いのにすぎません。

実はあと一週間ちょっとで受験だったりします、受ければ更新ペースが速くなると思いますが、落ちたら……………。

その14：激突の赤銅、砕け散る信念

グガアアアアアアアアアアアアアア！

耳が、鼓膜が碎けるような咆哮が響き渡る。
距離を置いているので耳を塞ぐほどではないが、やはり辛い。

「なにもこんなナイスタイミングで出てきてくれなくても……」

ドドブランゴを倒した今、ティガレックスはファイティングポーズのような低姿勢を解いて辺りを見回している。

……………気づかれて無ければいいなあ。

一応、太刀を収めて忍び足で移動してみた。

グルウ？

駄目だ、やっぱり気付かれた。

瞬間、奴は頭を下に、前足を弛ませるといふ戦闘姿勢に。
そのまま爆発するような勢いで前足で地を蹴り

「どうわっ!？」

空気を切り裂き、こちらに向かって飛び込んできた。

無様に頭から滑り込んで回避 できた！

しかし体勢を崩した俺とは裏腹に、ティガレックスはさっきまで俺の立っていた位置に平然と立っている。

ティガレックスの双眸がこちらを捉える、しかしそれと共に俺も奴と逆に転がった。

結果、ティガレックスの爪が空を薙ぎ、数瞬だけ隙が出来た。その間に両手に力を込め、跳ねるように立ち上がる。結構腕が痛いのだが言ってる場合じゃない。

「ていうか、シャレにならないなコイツ……」

こう喋っているうちにもティガレックスは次の行動の準備をしている。

前足と、今度は後ろ足にも力を込めている。今度は跳躍ではなく突進のようだ。

跳ぶのではなく走るのならばさっきよりも速度は遅いはず、そう思い全力で横に走る。

こちらのスタートの方が奴より少し早い、そのおかげでかわす事ができた。

「何度もカツコ悪い避け方してられるか……よ!？」

だが、次のティガレックスの行動は、完全に予想外だった。

自らの加速の勢いを前足で止め、慣性のままに体を浮かして方向転換、そして再び突進。

さすが古き種族、地上への適応は飛竜よりも高いようだ。

(とか、考えてる場合じゃないな……)

考えるのは一瞬で済むが体を動かすには少しの　だがこの状況では絶望的なまでの時間がかかる。

それならば　残された時間で考えろ、生き残る術を。お前はここで終わるのかアイン、生きたければ考えろ、考えろ、考えろ。

体に突進の風圧を感じるほどになった時、思いついたのはそれだっ

た。

《飛竜刀【紅葉】》を鞘ごと、背中から引き抜いて

「どりゃあ！」

凍った地面に突き立てる。

太刀は丁度ティガレックスの指と指の間に挟まる形になった。

ガアアアアアアアアア！

ティガレックスはさらに力を入れ、鞘をへし折ろうとする。

だが、俺も逆方向から両手を添えて押し止める。

これは最後の手段だ、太刀は元々攻撃を受けるようには出来ていない。

人間同士なら鎧迫り合いというのものもあるらしいが、やはり人間の細い刃とモンスターの力強い爪では力の差がありすぎる。

「ぐ……！」

そして鞘で補強しているとはいえ、現在も好ましい状況ではなかった。

添えた手が裂けそうになる、肩の関節がミシミシと音を立てる、鞘からビシリと欠けるような音がした気がした。

だがそれでも抑えきらなければ、生き残れない。

ガアアアアアアアアアアア！

「うおおおおおおおおおおおおお！」

腕が壊れそうだ、太刀もそろそろ危ない。

もう駄目か、そう思った時。

ボウガンの発射音が、聞こえた気がした。

メルとデリオは、洞窟から出て雪山を歩いていた。

洞窟の中からは降りられる足場が見つからず、外に違う入り口が無いが探しているのだ。

「で、でも、もしか、だ駄目だったら……」

「その場合は、一度村に下りて梯子でも探してくるしかない」

メルもデリオもこの山に来るのは初めてだ、見つけれない可能性も十分にあった。

しかしそれでも、一度村に下りれば手遅れになる可能性もあるのだ。二人はしばらく無言で歩く。

「……………ね、ねえ……………や、やっぱり……………一度む村に帰った方が、い、いいんじゃない?」

「……………かもしれないね。きちんとした道順も分かっていない私達が、探せるわけ……………」

メルがそこまで言った時、雪山に大きな、大きな「音」が響いた。

ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!

「う、うつつわぁ!?」

「この音……………うん、この声はティガレックス……………?」

まさかこんな所で会おうとは、と辺りを警戒したメルだが周辺にその姿を確認できない。

グガアアアアアアアアアアア！

もう一度聞こえたその声を、メルは今度こそしっかりと聞いていた。

「くぐもった音……ということは洞窟内かも……この近くに、空間が……」

「どど、どうしたの、メルちゃん！？ そそれに、こ、この声、は？」

「この近くに入り口があるかもしれませんが。
とはいえ、アインさんが居るかは分からないけど………」

言いながら、メルは雪が積もっている山肌を探り出す。

「わわわかった、入り口を、さ探せば、いいんだね？」

そしてデリオも、雪を掻き分けて何か無いか探し出した。

「とりあえず入り口なんか無くても、岩が薄い所さえ見つければこの洞窟は構造上丈夫そうだから、崩していけば……」

二人は岩肌を探り、時には叩いて厚さを調べ、そしてまた探り出す。

そしてしばらく後、メルは手の先に違和感を感じた。

「……な、何？」

デリオも近づき、二人で雪を除けていった。

「これは……金属？」

「う、うん……そそれに、普通じゃない。じ、人工物みたい……」

その金属は広い面積にわたって岩肌を覆っており（金属が洞窟内まで貫いているのかも知れないが）、とても自然にある物とは思えない。

「これは……」

眩きながら、メルは金属を籠手の部分で叩く。
そうすると硬質ながらも軽い音が返ってきた、どうやら大した厚みは無いようだ。

「こ、これは……もしかしたら、こ、壊せるかも……ど、どいていて」

指示通りにメルが下がる。

そしてデリオは肩口から勢いよく金属にぶつかった。

「う、うわぁ!？」

果たして金属は簡単に壊れた　　というか、外れた。
どうやら蝶番ちょうつがいの扉のような造りになっていたようだ。
しかも老朽化していたようで簡単に外れる、よってデリオは無駄に
ずっこけてしまった。

「あれは……！」

しかしメルはそれに構っている余裕など無かった。

飛竜と、それを必死に抑えるアインを発見したからだ。
さらに言うならば、その光景は妙な機材に囲まれた空間を隔ててい
たのだが、そんなものを視認する前にメルは行動に移る。

「なんでいきなりこんな事に……！」

背中に背負っていた大砲ヘビィボウガンを下ろし、構え、装填する。
そして引き金に力を込め　　撃つ。

ガアアアアアアアアアアアアアア！

通常弾ふつうの弾がんだが、どうやら気を引く事ぐらいはできたようだ。
ティガレックスがこちらを向き

「ティガ……レックス？」

違った。

その飛竜はティガレックスに似ているが、違う。
ティガレックスの体色は砂漠のような黄色に青や赤がまばらに混じ
っているようなものだ。

だがこの飛竜は、リオレウスのような赤銅色の甲殻を持っていた。
それ以外にも前脚にオマケのように付いているはずの翼が異様に大

きい事、尾の形状の違いから別種である事がうかがえた。

「何……？ 見たこと無い、これ……」

メルが呆然としている時にも、敵は動く。

火炎弾 ティガレックスならば吐くはずの無い が、その飛竜の口から放たれる。

一瞬ボウガン捨てて横に飛びかけたメルだが、火炎弾との間にデリオが立ち塞がった。

「あ、危ないよ、メルちゃん……ボートとしないで……」

デリオが構えた盾に当たった火炎弾は、霧散して氷を溶かした。

「う、ごめん……なさい」

一時混乱していたメルだが、デリオの言葉で目が覚めたようだ。

そして、正氣に戻ったメルは気づいた。アインが先ほどの位置のまま、先ほどの彼女のように立ち尽くしていることに。

「アインさん！ はやくこっち、」

叫びかけた時、メルは気づいた。彼の足元にある残骸に、残骸になっってしまったそれに。

アイン・フレンツの太刀は、中途から真つ二つに折れていた……。

その14：激突の赤銅、砕け散る信念（後書き）

はい、こちらでもオリジナルです。

ていうかもう半年近くやってるのに全然進んでないですね……街に着いてからが本番のつもりだったのに（泣）

最近感想に飢えています。

お時間のある方は、どうぞこの卑しいコニめにお恵みを！（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6327c/>

モンスターハンターズストーリー

2010年10月14日11時57分発行